〔研究ノート〕

池大雅と祇園南海

―宝暦11年刊『南海先生詩稿（前後二百首）』をめぐって―

寛延３年（1750）12月のある日、池大雅（1723～76）は紀州藩の儒者で詩人であり文人画家の草分けともいうべき祇園南海（1676～1751）を、紀ノ川北岸の自宅「湘雲居」に初めて訪ねました。大雅28歳、南海75歳。かねて柳沢淇園（1704～58）から大雅のことを聞いていた南海は彼を快く迎え入れました。南海は大雅を一目見てその「文人」としての資質を見抜きました。そして大雅が披露した指頭画法（指先や爪を筆代りに用いて画く水墨画法）を見るに及んで、ますますその奇才に驚きました。彼に今後の絵画の行く道を説き「子、画を学ばばまさに士大夫（文人）の画を学ぶべし」と教えたといわれています。別れに際して、愛玩していた明版の墨刷り画本一部（蕭雲従画『太平三山図（太平山水図）』とも、陳無名画『含山県八山図』ともいう）を大雅に贈りました。翌寛延４年、改元して宝暦元年９月８日に、南海は没しました。

南海と大雅の出会いは、このとき一回だけではないのではないか、その年のうちに何度か会っているのではないかと私は思っています。すでにたびたび紹介されていますが、寛延３年10月に紀州の客館で描いた大雅筆『楽志論図巻』の巻末に南海が仲長統「楽志論」を書写したものが付けられています。これが南海の真筆であれば、二人は再会したにちがいありません。

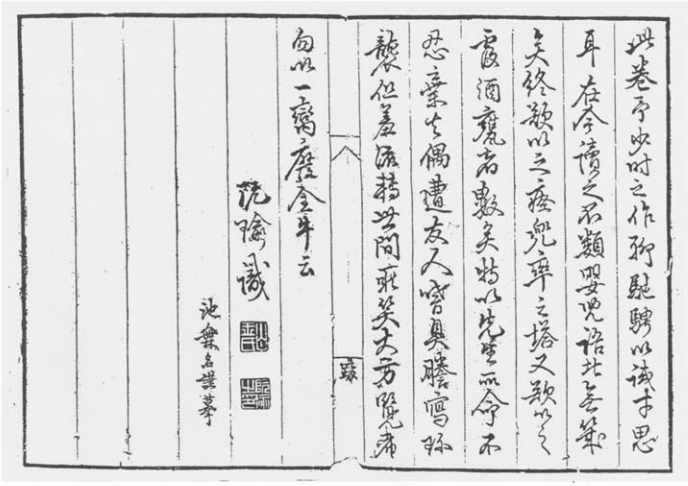
また、大雅は別の目的で南海に会っているのではないかと推測させる、もう一つの資料があります。南海没後11年目にあたる宝暦11年（1761）11月に平安書肆玉樹堂（京都堀川通佛光寺下ル町、唐本屋吉左衛門）から出版された『南海先生詩稿（前後二百首）』（別名「南海先生一夜百首」）二巻一冊の大本が、それです。上巻には「前題百詠」、下巻には「後題百詠」を収録しています。これは、南海17歳（18歳ともいう）、元禄５年（1692）の春分の日に半日で、木下順庵の門下生を前にして、五言律詩百篇をつくり、また秋分の日に再び試みて五言律詩百篇を成した、その詩篇をまとめたものです。この早熟の南海の天才ぶりは、当時の詩壇に知られるところとなりました。

さて、南海の在世中に刊行されたものとしては、正徳２年（1712）12月刊『賓館縞紵集』（正徳元年の朝鮮通信使と交わした詩文集）が唯一であります。南海は生前、それ以外の詩文集を上梓していないのです。それは南海の性格からくるのかもしれません。没後、最初に出板された詩集が、この『南海先生詩稿』であります。

『南海先生詩稿』の巻末に、「此巻予少時之作。聊馳騁以試寸思耳。在今讀之不類嬰児語之無策矣。終歎以之痤兜率之塔。又歎以之覆酒甕者數矣。特以先生所命不忍棄去。偶遭友人貸臭謄写珍襲。但羞流傳世間所笑。大方覧者勿以一臠廢全牛云。阮瑜識。白文方印『白玉氏』、白文方印『阮瑜之印』。池廉名謹摹」という南海の識語がかかげてあります。その識語によりますと、この巻とは若き日に成した五言律詩二百篇のことで、たまたま友人に遭い、乞われるまま、その拙いもの（臭）を貸し、謄写するのを許したという。ただ世間に流伝して物笑いのたねになるのが恥かしいので、その点を留意してほしいという。おそらくこの識語は、それを謄写した友人に書き与えたものでありましょう。識語のあとに小さく謹直に書かれた「池廉名謹摹」の五文字が注目されます（写真）。

『南海先生詩稿』の出版は、南海自筆の識語（印章あり）をもつこの謄写本をもとにして企画されたのではないかと推察されます。この自筆の識語は跋文として使えるものです。しかしそれを直接版下に使うわけにはいきません。そこで、これに縁がある人に版下のための模写をさせたと考えられます。つまりこの識語を謹摹した大雅こそがその謄写本の所有者で、南海が出会った「友人」とは彼のことではないでしょうか。南海研究の小田誠太郎氏（和歌山県立博物館）は、この識語の書風は南海の晩年のものを示し、また二つの印章は南海が晩年使用したものだ、と指摘しています。識語の通例として、おそらく、その個所には「友人池君」とあったにちがいなく、大雅は版下をつくるとき個人名を外したものと思われます。

『南海先生詩稿』の見返しに「白石先生批点、烏石先生校閲、南海先生一夜百首、平安書肆玉樹堂」とあり、校閲者は当時、京都の西本願寺に隠居していた書家の松下烏石（1699～1779）であり、大雅の友人である韓天寿の書法の先生にあたる人です。また烏石は題を乞われて「南海先生詩稿（前後二百首）」と付け、第一の序を書いています（年紀は「宝暦辛巳歳〈11年〉中秋〈８月〉前一日」）。烏石の序のつぎに大雅の友人の儒者清田儋叟（1721～86）の序があり、その年紀は「宝暦庚辰之春」とあり、この詩集の出版が宝暦10年の春にすでに計画されていたことを知ります。三番目の序は「南海伯玉詩稿序」とあり、韓人の李東郭が「辛卯中冬下浣〈正徳元年11月下旬〉」にし



『南海先生詩稿』のうち「南海識語」（池大雅模写）

たためたものです。彼は正徳元年（1711）の朝鮮通信使のうちの学士で文人として知られ、10月28日と11月５日の二度、江戸の東本願寺で南海らと筆談し、詩文を交わしています。そのとき南海は自筆本『南海伯玉詩稿』（『南海先生詩稿』の原本か）を彼に示し、その序文を請うたのでありましょう。その李東郭の序文は自筆本『南海伯玉詩稿』に附せられて、後、かの「友人」により謄写されることになったのでしょう。第四番目の序は南海生前からその高風を慕っていた詩僧の金龍道人釈敬雄（1712～1782）のもので、「南海詩稿序」とあり、年紀は「宝暦辛巳（11年）夏」とあります。なお、釈敬雄は翌宝暦12年の冬に南海の詩論『詩学逢原』の二写本を得て、校讐し序を書き、翌年９月に前出の平安書肆玉樹堂ら四書店から出版しています。

そして『南海先生詩稿』の大尾には、付属として師の木下順庵の「十八山東妙、声名世与聞、卮言甜似蜜、藻思湧如雲、人称斗南一、馬空冀北群、百篇不終日、行看任斯文」の「贈祇秀才」の一詩と、友人の新井白石のその和韻が添えられてあります。

『南海先生詩稿』は、大雅の知友や南海に心寄せる人たちにより宝暦11年11月に上梓されたものですが、その計画は僧叟の序文から前年の春にすでに始められていたことが推測されます。それは南海が没して十年目にあたり、彼を顕彰し「不朽の詩名」を世に示す目的のためになされたものと思われます。それを企てた人は、南海から大恩を受けた大雅その人ではないかと、私は推察いたします。

その上梓の後、宝暦11年の冬頃、大雅は祇園南海先生を、雲が群がり煙がなびく（『俳諧類船集』「浅間」の付合語に「富士」「煙」「峯の雲」などがある）、名ある富士よりもすぐれた「浅間山」（謡曲『富士太鼓』「名こそ上なき富士なりとも。あっぱれ浅間は優うずるものを」）に見立て、また師南海の「埋もれぬ名声」を、賛の「龍門」という言葉（白楽天詩「題故少尹〈元稹〉集後二首」の第二「遺文三十軸、軸軸金玉聲、龍門原上土、埋骨不埋名」）に託して、『浅間山真景図』（写真）を描いたのではないかと考えます。この画の広大な天と地は、その大いなる恩（龍門の恩）を象徴したものにちがいありません。（林進）

『浅間山真景図』池大雅筆　紙本淡彩　57.0×102.7cm.

季刊 美のたより №102
平成５年２月25日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.